

うみすずめ Vol.14

日本ウミスズメ類研究会 (Japan Alcid Society) 会報 1997年7月10日発行



油で死んだウトウ (1997年1月、京都府琴引浜にて。撮影・小野宏治)

Topics

ナホトカ号の重油流失事故に関連した会の動き (続報)

事務局が移転しました

油流出事故の恐ろしさ (アラスカ Exxon Valdez号の例)

海岸を歩こう (自然漂着する海鳥の調査方法)

釧路航路での出現データ

ナホトカ号の重油流失事故に関連した会の動き (続報)

日本ウミスズメ類研究会

§. 東京港での被害記録作業

日本ウミスズメ類研究会では、ナホトカ号重油流出事故での鳥類への被害記録について、(財)日本船舶振興会(日本財団)より緊急助成をいただき、東京港での作業を進めてきました。当初予定では3月中にすべて完了する予定でしたが、被害鳥の発送遅延などのため、5月をもってようやく一段落ついた状況です。しかし、この件でも報告書の部分が未執行となっているため、過日、財団宛に「事業完了期限の延長承認願および中間報告書」を提出しました。会員みなさんに、以下の通りご報告いたします。

財団法人 日本船舶振興会(日本財団)
会長 曾野綾子 様

日本ウミスズメ類研究会
代表 青山莞爾

〒078-41
北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目
北海道海鳥センター 内
Tel. 01646-9-2080 Fax.2090

事業完了期限の延長承認願および中間報告書

貴会よりご支援いただいている事業につきまして、下記の通り事業完了期限の延長を、中間報告を添えてお願いいたします。

記

事業名

「ロシア船籍タンカー重油流出事故における鳥類への被害記録整備支援」
(事業番号 609)

現在の進捗状況

日本ウミスズメ類研究会では、油汚染海鳥被害委員会(事務局・(財)日本野鳥の会)の一員として、ナホトカ号事故で死亡した海鳥の被害記録にあたってきた。

海鳥の死体は、各府県ごとに回収されたのち、すべて東京港野鳥公園に送られた(石川県の一部死体をのぞく)。研究会では、東京港野鳥公園のボランティアや職員とも協力し、死体保存・整理のための指導と作業を行ってきた(別紙マニュアル参照)。死体はすべてタグがつけられるとともに、コンピュータのデータベースに登録された。環境庁の指導により、目的ごとに各研究者に送付され(5月31日に最終発送)、今後は研究者の分析を待つこととなる。

今後の予定

当初計画では、データベースにいれられた死体台帳を印刷し、公表する予定であった。しかし、各研究者の分析が済まないため種名が確定しないため、今回の発行は見合わせる事になった。研究会では、今年9月に行われる予定の日本鳥学会大会で、自由集会を開くことを計画している。印刷費については、会合で使われる資料分として執行したい。

活動履歴、および活動計画

下記の通り、1997年9月をもって事業を完了する計画である。

1997年1月～3月 海鳥死体の回収と整理

3～4月 環境庁との協議（死体の分析方針について）

5月 研究者への発送

6月 油汚染海鳥被害委員会 打ち合わせ

9月 日本鳥学会大会にて、自由集会（油汚染海鳥被害委員会として）

【事業完了予定】

1998年1月 シンポジウム開催（WRVと共催予定）

会計報告

費目	予算額（円）	決算額（円）	収支（円）
旅費交通費	320000	318000	2000
物件費	150000	0	150000 印刷費未執行のため
事務費	230000	150250	79750
運搬費	200000	283002	- 83002
合計	900000	751252	148748

印刷費をのぞく部分については、上記の通りすべて執行済みです。別紙会計報告書を添付します。印刷費については、見積もりで252000円という額が出ています（見積もりを添付）。

添付書類

1. 重油汚染による死亡鳥の整理作業マニュアル
2. 死体台帳の一部（種名が確定していないため、未公表）
3. 会計報告
4. 印刷費見積書
5. エッセイ・海鳥被害とこれから（小野宏治）
WWF 6月号 Vol.27 (No. 240) 1997年6月1日発行

§. 現在の活動状況

現在、研究会ではつぎのような活動を行っています。

（1）海岸漂着調査（Beached Bird Survey、通称ビーチカウント）

海鳥は、事故の時だけでなく、通常の状態でも海岸に漂着する。ところが、事故の推定を正しく行うための自然状態での漂着率の調査は、これまで日本では行われていない。現在、北海道の日本海側海岸数地点と、石川県片野海岸で、調査がはじめられている。

（2）繁殖地での被害状況調査（兼、繁殖現状のモニタリング）

福岡県小屋島、北海道天売島、および隠岐諸島。油流出域から離れているものの繁殖に影響があると予想される地域において、繁殖現状調査が行われている。

（3）航路センサス

山形県飛島において各3回（すでに春の調査を実施済み）、隠岐諸島において通年の航路センサス（藤田泰宏さんが実施）を行う。

§. 鳥学会での自由集会を開催予定

今年の秋の鳥学会で、自由集会を計画しています。ひとつは研究会独自のもの(9月19日を予定)、もうひとつはOBIC(油汚染海鳥被害委員会)としての集会です。研究会独自のものにつきましては、内容等、詳しいことが決まりしだい、またご案内いたします。

名称

油流出による野生生物への被害防止体制の確立を目指して
—アメリカに学ぶダメージアセスメント—
(野生生物への被害規模調査)

主催者

日本ウミスズメ類研究会、(財)日本野鳥の会、WWF Japan

日時

97年9月21日(日)

午後1時から午後3時半

場所

新潟大学(97年日本鳥学会会場)

開催の目的

背景

97年1月に発生した日本海重油流出事故では、多くの海鳥を中心とした野生生物への被害が起こった。これに対応しOBIC海鳥被害調査委員会が日本ウミスズメ類研究会や日本野鳥の会などにより結成され、被害個体の回収のため環境庁や都道府県、関係機関との調整をはかった。一方、現場では日本野鳥の会の支部などが、被害個体の回収と汚染規模の調査を行っている。また環境庁は、(財)日本鳥類保護連盟に委託をし、ナホトカ号油流出事故による海鳥類への影響に関する調査の実施と検討委員会を開催している。

目的

これらの現状をふまえ、調査活動の現状を把握し共有するため、どのような調査活動が誰により行われたのかと、その活動の結果を集積する。さらに調査活動の目的が、ダメージアセスメント(野生生物への被害規模の推定)であったことを確認し、目的達成のためにやるべきではあったが、できなかった活動も確認する。

そして今後の油流出事故に備えるため、ダメージアセスメント実施体制確立の検討と、より効果的な被害防止策を取ることができるよう、アメリカなどで行われているセンシティブエリアを特定し地図化することを検討する。

§. 冷凍庫の寄贈

油汚染海鳥被害委員会(事務局・(財)日本野鳥の会)より、研究会調査の海岸漂着死体の保管用として、大型冷凍庫の寄贈を受けました(北海道海鳥センターに設置)。

海岸で漂着した鳥の死体を見つけた場合は、ぜひ事務局宛にお送りください。貴重な資料として有効活用させていただきます。

§. ペンギン会議からの寄付

重油事故の件で、ペンギン会議より約10万円の募金をいただくことになりました。募金は「海鳥研究・保護基金」に繰り入れ、有効に活用させていただきます。どうもありがとうございました。

§. 東京湾で油流出事故

この会報も最終の編集作業に入った段階で、今度は東京湾で油流出事故が発生しました。いまのところ、鳥への被害は見られていませんが、油処理剤の散布などによる生物相全体への影響も懸念されます。会では今後も関係各機関と連携を強め、事故の成りゆきを見守っていききたいと思います。

事務局が引っ越しました

研究会の事務局が、幹事の就職に伴い、今年4月より東邦大学から北海道海鳥センター（苫前郡羽幌町）に移転しました。北海道海鳥センターは、環境庁・羽幌町・北海道により、今年新設されたばかりの機関です。海鳥に関しては日本で唯一の施設であり、北海道を中心とした海鳥の研究施設として、また、保護啓蒙の拠点として活動することとなります。

会報作成は、これまで通り小野が担当していますが、フィルムスキャナもくわわり、よりグラフィカルな会報を作成できるようになりました。

センターの詳細につきましては、会報に同封のパンフレットをご参照ください。また、お近くにお寄りの際は、ぜひセンターにお立ち寄りください。

北海道海鳥センター

〒078-41
北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目
ph: 01646-9-2080 fax: 9-2090



油流出事故の恐ろしさ (Exxon Valdez号の例)

翻訳・中澤 鳩

〒216 川崎市宮前区小台2-19-2 LM宮前平3B - 206
GHF00256@niftyserve.or.jp

油流出事故が起こると、生態系にどのような影響が出るのでしょうか。1989年にアラスカで起きたエクソン・バルディーズ号の事故では、36400トンの原油が流出し、鳥だけでなく、アラスカの自然に大きな被害をもたらしました。

原文はAlaska's WildlifeのVol. 25 (1)で、翻訳は、日本ウミスズメ類研究会会員の中澤 鳩さんによるものです。研究会のホームページ (http://www2.gol.com/users/kojiono/Oil_Valdez.html) にも掲載しています。

考古学的資産

著名な19の地点で被害が出ている。多くの地点で、そこで得られる知識が多ければ多いほど、損傷のリスクもより大きい。

食料生産

油流出の年、汚染域の村々で収穫高の減少が77%にのぼった。Tatitlekでは数タイプの収穫物の収穫が半分にまで落ち込んだ。1991年までにコディアクとクック湾下流部では若干持ち直したものの、TatitlekやChenega bayでは殆ど回復していない。

鳥類

3万6千羽の死体が発見された。30万から64万5千羽が最初の月に死亡しており、汚染による慢性的な影響による繁殖力低下のため、続く数年の間にさらに多くの鳥たちが失われた。

ウミガラス

17万5千から30万羽が死亡したと見積もられている。油に汚染されたコロニーでは通常の繁殖行動パターンが崩壊しているのが見られた。大きなコロニーの幾つかでは、1989年・1990年・1991年は全く繁殖できなかった。そのため少なくとも見積もっても30万羽の雛が失われた。

シノリガモ

約1000羽が死亡。200羽の死体が見つかった。1989-1990年には、シノリガモの33%が衰弱

しそのほぼ全個体が1990年・1991年・1992年には繁殖できなかった。

ハクトウワシ

151羽の死体が見つかったが、全体で900羽もが死亡したと見積もられている。プリンス・ウィリアム・サウンドでは卵の85%が孵化できなかった。1990年には繁殖率が回復した。慢性的な影響はあまり懸念されない。

他の海鳥

37万5千羽から43万5千羽が死亡したと見積もられている。39種のうち16種が1972-1973年のデータと比較して個体数を減らしている。クロミヤコドリ、ウミガラス、ウミバト、キョクアジサシ、エトピリカは、油流出以前の1984年と比べても明らかに個体数が減少している。海鳥全体の回復状況は完全には調査されていない。

陸生哺乳類

ヒグマやアメリカクロクマ、(シトカ)オグロジカに関しては、油に曝されたという証拠はあるが、明らかに汚染が原因という被害は観察されていない。

カワウソ

12頭の死体が見つかったが、死亡数はもっと多いと見られている。血液と胆汁中に炭化水素が見つまっている。油で汚染された地域は餌が減ったため、そこに住むカワウソたちはかなり広範囲に渡って餌探しをする必要に迫られたた

め、(1991年末になっても)体長と体重が減少したままである。

海生哺乳類

ラッコ

1013頭の死体が見つかった。3500頭から5500頭が死亡したと見積もられている。プリンス・ウィリアム・サウンドにおける個体数は、非汚染地域で13.5%増加しているのに対して汚染地域では34.6%減少している。保護し回復したラッコ45頭にタグを付けて放したが、30頭が死亡したか行方不明になった。繁殖適齢期の成獣と幼獣の死亡率がより高くなれば、絶滅に瀕したラッコの年齢構成に重大な変化をもたらす。1990年と1991年の船からの調査では、はっきりとした回復の兆しは見いだせなかった。

シャチ

プリンス・ウィリアム・サウンドに住む"AB群"では、36頭(1988年)から29頭(油流出後)、そして23頭(1990年)と減少している。この群れの流出以前の平均死亡率は6%であった。幼獣を連れた雌が通常以上に失われることは、群れの社会構成に重大な変化をもたらす。背びれがつぶれた雄もいた。36頭の群れへの回復は15年を要する。1990年以来2頭が産まれているが、流出した油がどのような連鎖で被害を及ぼすのかは明らかになっていない。

ゴマフアザラシ

200頭が死亡したと見積もられている。1991年の春、胆汁中の炭化水素類が高濃度を持続した。これは油に曝され続けていた事を示している。多くのアザラシの脳障害が報告され、流出後の異常な行動と関係のある可能性が高まっている。1991年、個体数は低迷したままだが、若干の回復が見られた。

他の海洋生物

1989年、ザトウクジラが本来の棲息域から姿を消したことや、トドが受けた被害については詳細な報告がない。

生態系

潮間帯

1565マイルにわたって海岸線が油で汚染され

た。潮間帯に住む全ての生命体の個体数と棲息密度が減った。ただし、ムラサキガイは例外である。ムラサキガイの個体数は増えたが個体サイズは小さくなった。油は自然に浜辺から消えるが、それは潮下帯に運ばれただけであり、汚染は続いている。1991年には高濃度の油がムラサキガイとその下の底質に発見されており、この事によりムラサキガイが他の動物に比べて油汚染の広がりを調べるのに優良な指標になっている。褐藻域の比率が減り、代わって先駆植物が増えた。

潮下帯

1989年から1991年にかけて潮間帯の底質中の油の濃度は下がったが、潮下帯浅瀬の底質の濃度は変わらないか若干増加した。1990年には油で汚染された底質が330フィートにわたって見られた。アマモ群落への被害により浅瀬の海底に棲息するカニや端脚類のような無脊椎動物が減り、かわりに腐肉食種が増えた。1991年には個体数が幾分か回復した。海底やその周辺に棲む動物は、通常の状態以上に炭化水素類に曝され続けている。二枚貝は成長が遅れている。膨大な数の二枚貝が、海岸の汚染を取り除く際に破壊された。

魚類

成魚も死亡したが、卵や幼魚への被害のほうが重大である。特に潮間帯に棲息・産卵する種(サケ)や潮下帯に棲息・産卵する種(ニシン)あるいは浅瀬で餌を探す種(オシヨロコマとニジマス)である。

カラフトマスとサケ

油で汚染された河川での卵の死亡率は、油のない河川と比べて、それぞれ67%(1989年)、51%(1990年)、96%(1991年)、大きかった。1991年には、油の届いていない上流で死亡率の増加が見られたが、おそらくこれは遺伝子に受けたダメージの結果であろう。若魚の成長率が落ち(通常より25%小さい)、成魚まで成長した個体の率が落ちた(43%落ちた)。1989年には汚染された河川のいくつかで、稚魚と二年魚に奇形が見られた。1990年のサケ・マスの漁獲高は、汚染されていない場合に期待できる漁獲高よりも20%から25%低いと分析する専門家もいる。1992年は前年に比べて漁獲高が約25%落ちた。

ニシン

1989年と1990年は卵・幼魚の死亡率、成魚の機能障害と寄生虫による発病および奇形が汚染された海域で非常に多かった。しかし1991年には油の汚染海域と非汚染海域との間に際立った違いは見られなかった。だが1992年の産卵回遊群の中に、ニシンの3年魚の数が著しく少なかった。

オシヨロコマ (Dolly Varden) / ニジマス (Cutthroat Trout)

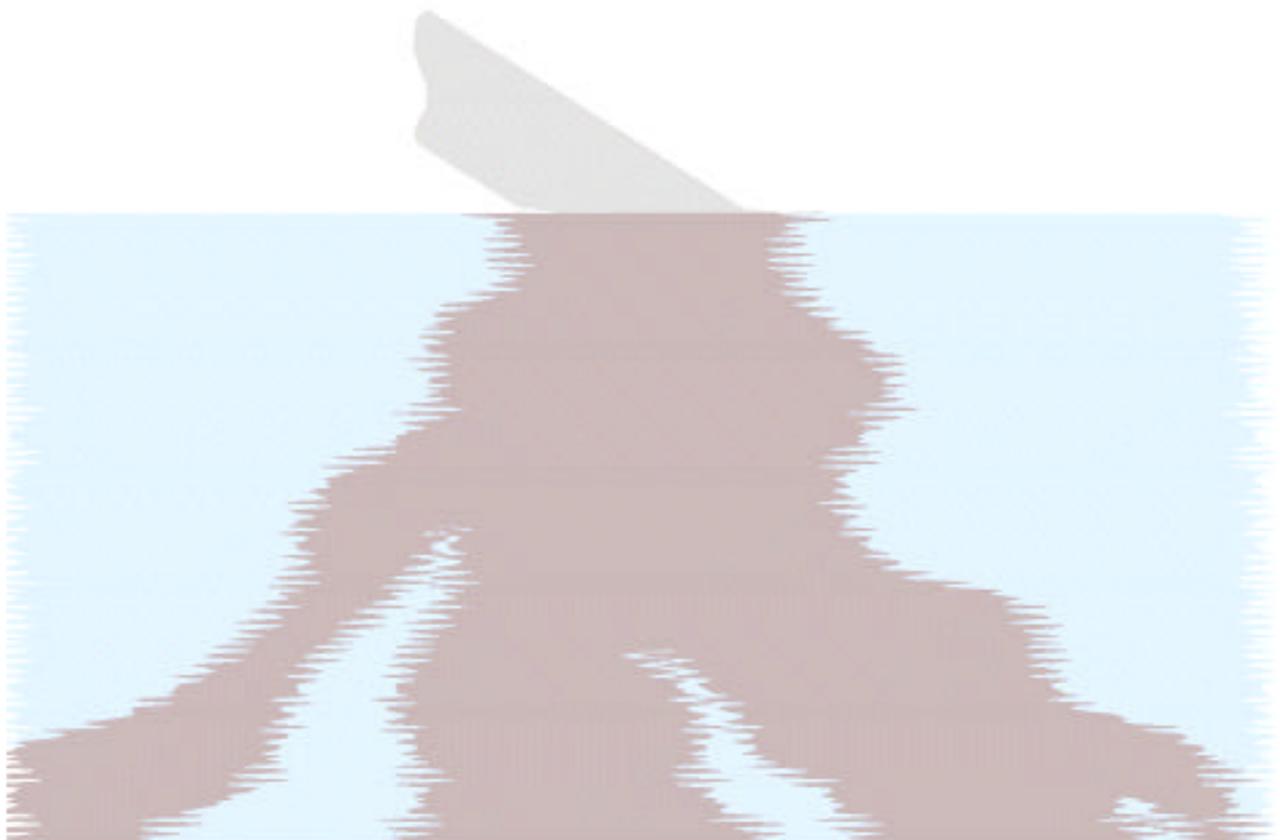
1989年から1990年にかけてのオシヨロコマの成魚の生存率は油の汚染域で38%小さかった。ニジマスの場合は29%小さかった。両種とも、1989-1990年には成長が通常よりも約43%小さかった。が、1991年には回復した。1991年は生存数は汚染域で依然として小さいままである。油の曝露が減っているにもかかわらず。

ベニザケ

キーナイとコディアク島周辺の過剰退避 (overescapement) の結果、餌がほとんどなくなってしまい、若魚の生存率は低かった。これにより成魚の回帰率が、1994年と1995年にはコディアクで20~50%、キーナイで90%減少するだろうと予想された。そしてこの傾向は続くだろうと。

rockfishと他の海魚

rockfishは1989年にはかなり死亡した(200尾の死体が観察された)。また機能障害のような致命的な傷害も。炭化水素類がオヒョウやポラックやrock (fish) の胆汁、キハダマグロ、ソール (flathead sole)、ニシン、マダラ、そして1990年には、ギンダラ、カレイから見つかっている。



海岸を歩こう (自然漂着する海鳥の調査法)

佐藤美穂子

〒078-41 北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目
北海道海鳥センター友の会
Ph: 01646-9-2080, Fax: 01646-9-2090
poco@gol.com

ナホトカ号の事故後、(財)日本野鳥の会会員を中心としたボランティアによる海岸センサスが行われ、たくさんの油にまみれた鳥が回収されました。しかし、海岸に漂着する以前に沈むなどして失われる個体も多く、実際の被害規模は回収数の十数倍にのぼることもあります。このため実際の事故の被害規模を推定するために、正確な漂着鳥のデータは欠かせません。

ところで、このような海洋汚染とは関係なく、海鳥はさまざまな理由で死亡し、その死体は海に沈んだり、海岸に打ち寄せられたりします。事故の被害推定を行うときには、この自然状態での漂着頻度も考慮に入れることが望ましく、国外の例では、自然状態でのビーチカウント (Beached Bird Survey) 調査結果が被害推定にも反映されています。しかし、日本では既存の調査例がありません。そのため、日本ウミスズメ類研究会では、会員や石川県片野鴨池観察館 ((財)日本野鳥の会) の協力を得て以下のように、ビーチカウント調査を行うこととなりました。調査地と調査方法について紹介いたします。

・実施中の調査地

調査期間 1997年4月～1998年3月

〔調査地〕	〔調査者〕	〔調査回数〕
北海道天塩郡天塩町	小野宏治・佐藤美穂子	月2回
北海道苫前郡羽幌町	小野宏治・佐藤美穂子	月2回
北海道苫前郡苫前町三豊海岸	小野宏治・佐藤美穂子	月2回
北海道石狩郡 (実施予定)	渡邊智子	月1回
石川県加賀市片野海岸	大畑孝二	月1回

このほか、兵庫県と京都府で (財)日本野鳥の会によるビーチカウントが行われています。

ビーチカウント調査法

歩く海岸を決める

通年通うことが可能な範囲で、漂着物が多くて幅の広い砂浜を選びます。砂浜を選ぶのは、岩場では調査範囲を網羅することが難しく、岩に挟まった漂着鳥を見落とすこともありうるためです。また、せっかく漂着した鳥がふたたび波にさらわれて失われることないように、幅

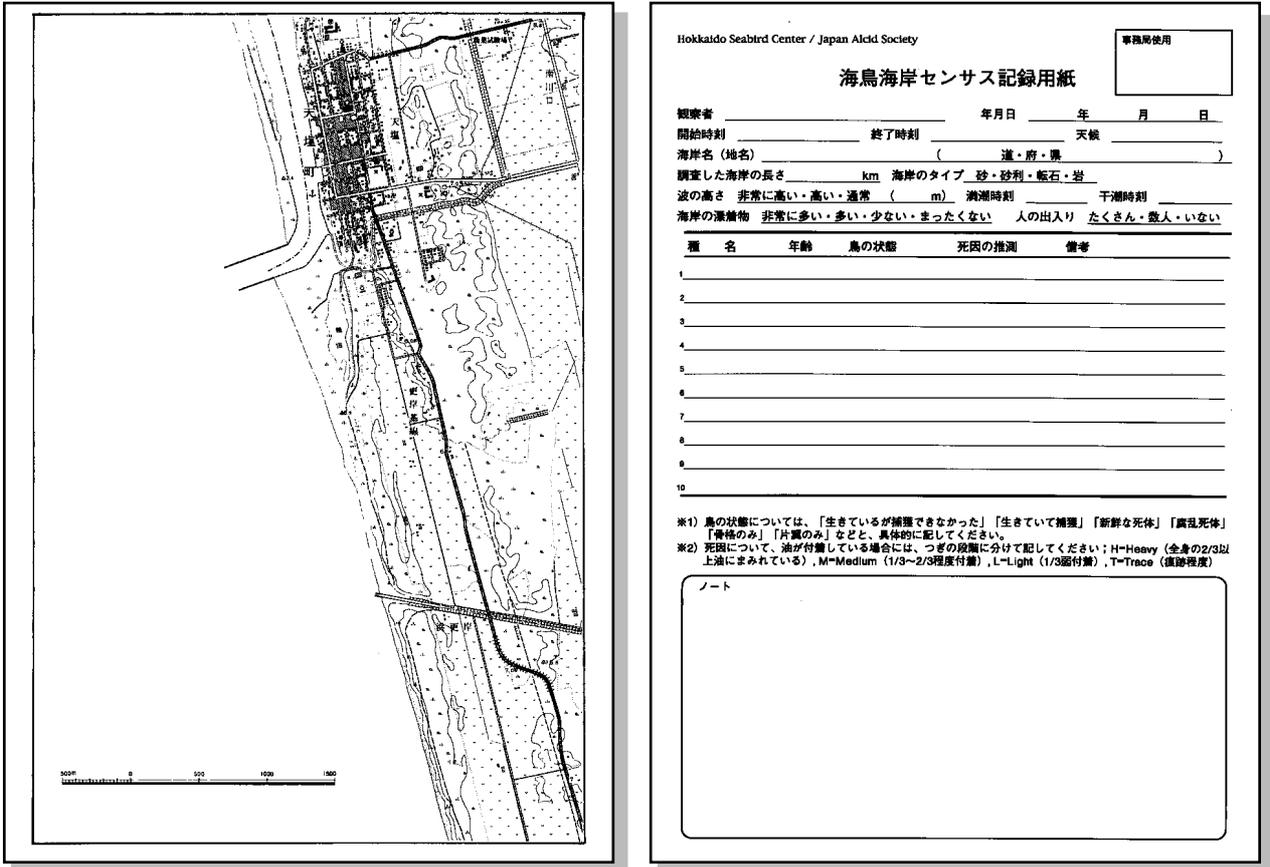


が広く漂着物の溜まりやすい砂浜を選びます。

地図をつくる

天塩、羽幌、苫前では、次のような地図を使っています。

1/25000の地図から調査範囲とスケールを、143パーセント拡大コピーし、A4版に切り抜き調査範囲を区



切ります（下図）。

調査票をつくる

調査日や時間帯、漂着物の多少、漂着鳥の種名や状態などを記録するための調査票をつくり（上図）。

持ち物を準備する

調査には、次のような物が必要です。

地図、調査票、ボード、鉛筆、マジック、コンパス、長靴、雨具、軍手、ビニール袋（漂着死体を入れるためのいろいろなサイズの袋）、**紙袋**（重油が付着した鳥を入れる袋）、**カメラ**（海岸の状態や、漂着死体を記録する）、**クーラーボックス**（漂着鳥を入れる）

調査開始

準備が整ったら調査開始です。砂浜を、海岸線と平行した左右に目が行き届く幅の帯に分け、漂着鳥を見落とさないように、目を配りながら歩きます。端まで歩いたら隣の帯と、調査範囲を網羅するようくり返し縦断します。このとき、数人で等間隔に並んで歩くと楽です。また、カラスなどが移動させた死体

も見逃さないように、波打ち際だけでなく砂浜の陸側も歩きます。

鳥の死体を見つけたら...

漂着鳥を見つけたら、調査票に必要事項を記録し、地図に地点を落とします。記録のために日付入り写真をとって、日時、場所、種名などを記入したビニール袋に入れて持ち帰ります。

もし、拾った死体に重油がついていたら、まず紙袋に入れてからビニール袋に入れ、後ほど分析に回します（石油製品であるビニール袋に重油が直接



海岸に漂着したウミネコの死体
(天売島でつけられたリングが付いている)

触れると、化学反応を起こして重油の性質が変わり、分析できなくなるため)。天塩、羽幌、苫前では、海上保安庁側から申し出があり、重油の分析をしていただきました。

持ち帰った鳥の死体は...

必要に応じて種の同定や計測などを行います。その後の死体は、再度漂着して記録が重複することを防ぐため、そのまま放置したり、海に捨てることは避けています。天塩、羽幌、苫前の漂着鳥の場合は、とりあえず北海道海鳥センターの冷凍庫に保管し、必要に応じて標本を作成する予定です。

調査者を募集しています。

死体を見つけ出す眼をもって、近所にちょうど良い砂浜があり、調査日を確保できるならば、上記のように調査自体はさほど難しくはありません。

日本ウミスズメ類研究会では、調査を全国で展開するため、調査者を募集しています。最寄りの海岸（砂浜）で月1回から2回のピーチカウント調査が可能で、調査に関心のある方は当会事務局までご連絡下さい。種の同定が出来ない場合や死体の保管場所のない方は、漂着鳥を、着払いのクール宅急便（冷凍）で、北海道海鳥センター（〒078-41 北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目、Tel.01646-9-2080）へお送り下さい。

釧路航路での観察 (1997年4月2 ~ 3日)

馬場芳之

(九州大学大学院比較社会文化研究科 日本社会文化専攻博士課程 前期2年)

〒810 福岡市中央区六本松4-2-1九州大学大学院

比較社会文化研究科地域資料情報講座

小池研究室 (気付)

Ph. & Fax: 092-726-4847 (小池研究室)

baba@hiroko.rc.kyushu-u.ac.jp

徹夜を何回かして生態学会を乗り切り、予定の釧路航路に乗ってきました。航路での結果を報告します。なにぶん海の鳥に弱い一人がとったデータなので種の識別、個体数など少なかったり間違えてるかもしれません。この四月から消費税が引き上げになったので船内の物価等も一緒に記します。

なお、

- ・ 1時間ごとの種数とだいたいの数しかメモを取っていない。
- ・ 1時間につき10分ぐらいはトイレなどで休んでいた。
- ・ ほとんど双眼鏡のみの観察であることと距離感の不足から300mの距離の区別はしていない。
- ・ 鳥が多いときは不明種の記録すらもできなかった。
- ・ 観察者が初心者

であることを、あらかじめご了解ください。

§. 船の様子

乗客は少なく、2等の二段ベットは下段のみの使用だった。ベットの指定はフェリーターミナルでの受け付けの時にキップにベットの番号のシールを貼ってくれた。

食堂 高い

朝食 セット 1100~

昼食 ピラフ・カレー・スパゲティ 900~

夕食 牛丼 900~

コーヒーラウンジ

焼そば 550・カレー 600

同 夜食 月見うどん 580~

自動販売機

普通の清涼飲料水 150円

その他食料の販売

カロリーメイト 250円 (自販機) 売店にスナック菓子類やつまみ類など。

風呂 (無料)

備え付けのシャンプーとセッケンがある。すいていたので海を見ながら楽しい入浴をした。

給湯室

Cデッキ前方にある。カップラーメン等は売っていないので、食事をけちる人は事前に購入する必要あり。事前になにも買っていなかった貧乏人の私はひもじい思いをした。

§. フェリー乗り場へのアクセス

釧路駅 フェリーターミナル(西港)

バスセンターに10時40分までに行き、フェリーターミナル行きチケット(300円)を買う。

東京フェリーターミナル 新木場(orユリカモメ乗り場)

フェリーが着くと臨時バスがでる(200円)。新木場行きに乗ると途中ユリカモメの駅で停車する。

§. 日の出と日没(船の掲示)

1日目(4月2日)

日没 18:03

2日目(4月3日)

日の出 5:18

日没 18:05

§. 観察方法

Cデッキ中央部右舷(陸側)の窓から、主に肉眼と双眼鏡で観察。最初の1時間Bデッキの外でが
んばったが、結局寒さに負け船内からの観察にした。1時間ごとに種名をリストアップした。

この観察方法の明らかな欠点は船に驚いて一回海に潜るアビ類・ウミスズメ類が浮上するのが船
体の後方なのである程度見逃した可能性が大きい。これらの鳥が再び海面に姿を現すのは船の後方
の場合が結構多かった。

さらに双眼鏡をメインとしているので(ニコンのフィールドスコープを持っていたのだが後輩に
貸していたらそいつがなくしてしまい、今は300ミリのレンズにアイピースを糊づけして使って
いる。)300 までの鳥を全て確認するのは不可能だった。

また今回の2日目は天気が悪く識別が困難な場面が多かった。犬吠岬沖など鳥が多い時にこのよ
うな鳥の記録が取れなかった。

時間と船の位置の関係(船の中のモニターによる。カーナビのようなものが表示してあった。4
月から東京行きは全て十勝に寄るそうです。)

1日目

12時 釧路発
15時40分 十勝着
17時 十勝発
18時 襟裳岬(日没)

2日目

7時 相馬沖(このとき放送で船速が時速37kmと言っていた。)
9時 塩屋岬沖
10時 姉妹船とすれ違う
12時 犬吠岬沖
15時 御宿沖
17時頃 千葉県南端沖
18時頃 外東京湾にはいる

§. 観察結果

(次ページ)

観察者 馬場芳之

航路名 釧路 十勝 (東京) 4月2日はAデッキ右舷、4月3日はCデッキ右舷中央にて観察

年月日 97年4月2日、3日

Code	種名	4月2日			4月3日					
		12時	13時		7時	8時	9時	11時	12時	15時
	アビ					1				
	オオハムsp								2	
	カンムリカイツブリ								1	
	クロアジアホウドリ							1		
	オオミズナギドリ				12	多数	多数	多数	多数	多数
	ハシボソミズナギドリ					1			1	
	オーストンウミツバメ							1		
	ウミツバメsp							5+-		
	クロガモ	100+	50+							
	ウミアイサ	10±								
	ヒレアシシギsp.		20±							
	カモsp	100+							36	
	トウゾクカモメ				1					
	クロトウゾクカモメ				1					
	トウゾクカモメsp				1					
	セグロカモメ	100+	10±		3	2	1+	1+	4	
	オオセグロカモメ					1	1			
	カモメ	1			1					
	ウミネコ	50-			5	8	1		1	
	ミツユビカモメ				50+-	1	1+			
	カモメ若鳥sp	10±	10±		1	6	3		2	
	カモメsp		1							3
	ウトウ?								3	
	ウミスズメ?								4	
	小型ウミスズメsp								11	
	ツバメ						2			
	スズメ大sp				1					
	黒いハト大sp				1				1	
	場所				相馬沖		塩屋岬沖	犬吠岬沖		御宿沖
	天候	晴れ			曇り	曇り	曇り	曇り	曇り	雨
	風向、風速	弱風								
		穏やか			やや波が 高い	やや波が 高い	やや波が 高い	白い波が 目立つよ うになる	白い波が 目立つ	大きめの うねり?
	海面の状態									
	観察条件									
	備考	釧路港周辺								

日本ウミスズメ類研究会の再編成についての私案

小野宏治

(北海道海鳥センター 研究員)

〒078-41 北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目

Tel.01646-9-2080 Fax. 01646-9-2090

E-Mail: kojiono@gol.com

日本ウミスズメ類研究会は1993年に設立され、三年半にわたる会の歴史の中で、これまで14号の会報を発行し、特別印刷物を1度発行しました。また、3度のシンポジウムの開催と、シンポジウムに伴う2度の要旨集の発行を行ってきました。

設立当初は数人だった会員も、いまは140人を超えるようになり、同時に、油流出や海洋汚染の問題とともに、海鳥研究の社会的需要も高まりつつあります。

研究会は、実質的に日本で唯一の海鳥研究者の組織となっています。そのため、会の名前とは逆に、活動自体はウミスズメ類だけを扱ってきたわけではありませんでした。

こうしたことから、会務の見直し、および会の名称と業務について再検討する必要が生じています。

組織の再編成は、事あるたびに議論されてきましたが、以下に新組織の具体案を示し、たたき台にしたいと思います。会員のみなさんのご意見をお寄せください。

日本海鳥協会（仮称）の設立骨子 案

日本海鳥協会（JAPAN SEABIRD SOCIETY）は、日本ウミスズメ類研究会を設立母体とし、日本の海鳥全般の保護と研究に貢献することを目的とする。

これまでに、会報やシンポジウムなどで海鳥全般を扱っており、また、実質的に日本で唯一の海鳥研究者の組織となっているためである。今後はウミスズメ類にこだわらず、幅広い活動をしたい。

設立にあたり、つぎの改革を提案する。

1. 年会費制の導入

日本ウミスズメ類研究会では、会の財政の許す限り「連絡をとり続ける」という運営方針で、連絡費が未納であっても、退会の意志表明がない限り、会報を送り続けてきた。

しかし、海鳥全般を扱うにあたり、会員の増加が見込まれ、同時に諸連絡や会報にかかる費用の大幅な増大が予想される。

したがって、今後は年会費制を導入し、会の運営の安定化を図りたい。

具体案

会員をA会員、B会員に分ける。区分はつぎのとおり。

A会員.....1000円/年の徴収。会報の発送、行事の案内。会で発行する書籍の会員割引あり。その他、会員特典あり。

B会員.....無料。行事の案内など。

現在の会員は、設立時より1年間、自動的にA会員に移行する。会費の滞納が1年以上続いた場合にはB会員として扱う。

問題点

会費を徴収する以上、会報の発行がある程度義務づけられる。たとえば、最低年4回、トータル16ページ以上を発行する、などの基準を設ける必要性が出てくる。

2. 会の体制の見直し

日本ウミスズメ類研究会は、青山莞爾（東邦大学理学部教授）を代表とし、5名の幹事が運営にあっている。しかし、会務が一部の幹事に集中し、会員の増加（現在約140名）に伴い、仕事量の限界に達しつつある。

会の体制を見直し、分業化を図りたい。

具体案

- ・名実を伴った会代表の設置と選挙制の導入
代表の選出にあたっては会員による選挙制を導入する。
- ・組織の見直し

代表の下に、会の長期的な運営方針を決める「評議員」を数名設置する。評議員は海鳥の保護と研究に幅広い見識を持つ人より構成したい。

いっぽう、会の実際の組織運営にあたる「幹事」を数名設置する。幹事はすべて担当業務を持ち、会の活動に責任を持って従事する。

会計担当...一般会計業務

編集担当...会報の編集（記事は全幹事が責任を負う）、発送

広報担当...ホームページの制作、広報に関わる諸連絡

入退会担当...入退会者の受け付けと会報用のタックシール印刷、データベース管理

必要に応じ、特別委員会を設置する。たとえば、助成に伴う特別会計の管理や、選挙の実施、出版物の作成など。

すべての仕事は各幹事が責任を持って分担し、できるかぎり均等に会務を請け負う。また、一部の仕事を除き、特定の幹事が特定の仕事に就かないよう、努力する。

- ・会の運営方針は、代表者と評議員、幹事からなる「運営委員会」が決定する。
- ・運営委員会は最低年に一回開かれる。
- ・運営の実務は代表者と幹事からなる「幹事会」が決定し、評議員に報告する。評議員は幹事会の決定に対して異議を唱えることができ、複数の異議があった場合には運営委員会に決定をゆだねる。
- ・代表者と評議員は、会員の選挙により選ばれる。幹事は代表者と評議員により推薦される。ただし、複数の評議員より異議があった場合には、会員による選挙を行う。

3. 会報の見直し

魅力のある印刷物を刊行するためには、幅広い情報源から情報を取り入れる必要がある。また、将来的にはカラー写真を多く取り入れたリーフレットの作成など、「見て楽しい」出版物も発行したい。

具体案

将来的には全国をつぎのようにブロックに分け、担当者を決める。担当者は毎回必ずなんらかの地域情報を発信する。たとえば、新聞記事や各ブロックの会員の動向など。

北海道、東北、関東・甲信越・東海、近畿・北陸・中国・四国、九州・沖縄、海外

同時に、会員からの幅広い情報を集める。

会からのお知らせ JAS INFORMATION

「海鳥研究・保護基金」が設立されました

前号でお伝えしましたが、ナホトカ号事故に際して、さる方からのご寄付をいただき、そのお金をもとに「海鳥研究・保護基金」を設立し、口座を開設しました。

口座は、次の通りです。

口座名： 海鳥研究・保護基金

口座番号： 02720-9-12926

研究会では、基金を「科学的データをもとにした保護活動」に役立てたいと考えています。また、基金の運用に際しては、現在、幹事間で協議していますが、さらに今後、基金運用委員会を研究会内部に設置する予定です。なお、6月15日現在、つぎの方々よりご寄付いただきました。紙面を借りてお礼申し上げます（敬称略）。

教海啓介 10000円、二木 務 1000円、倉川典夫 4000円。

P.N.ファンド活動報告

日本ウミスズメ類研究会では、設立当初より（財）自然保護協会によるP.N.ファンド助成（第5期、第6期）をいただき、これまで数多くの成果を上げることができました。関係者のみなさんに改めて感謝いたします。さて、本来ならばすでに報告書が出されているはずなのですが、編集作業に手間取り、報告書のみ未執行となっています。現在、作業を進めている最中ですが、つぎのような構成を考えています。

1. タイトル

『希少ウミスズメ類の現状と保護』

2. 内容

内容	予定ページ数	進行状況（5段階）
【序文】		
はじめに	1	
【ウミスズメ類の現状】		
マダラウミスズメ調査報告（Nelson et al.）	30	
小屋島調査報告（武石全慈）	2	
隠岐諸島調査報告（藤田泰宏）	2	
天売島センサス（福田佳弘）	8	
定点調査・小樽（渡邊智子）	6	
定点調査・積丹（佐藤領江子）	6	
定点調査・網走（川崎康弘）	4	
【ウミスズメ類の保護】		
ウミスズメ類の保護（仮題）（小野宏治）	10	
【ウミスズメ類の調査】		

海岸に打ち上げられた鳥の調査 (佐藤美穂子)	4
繁殖現状調査 (小野宏治)	8

くわえるべき内容や原稿などありましたら、至急事務局宛に送ってください。
また、構成に関するご意見をお寄せください。

長谷川さんが受賞

アホウドリ研究者で、東邦大学助教授の長谷川博さんが、(財)国立公園協会の第18回田村賞を受賞されました。長年にわたるアホウドリの保護研究活動が受賞の理由です。おめでとうございます。

肘団法人 国立公園協会 第18回田村賞 受賞の挨拶
1997年6月19日
長谷川 博

みなさま、こんにちは。東邦大学理学部の長谷川博です。

かなり日焼けした顔だとお気づきでしょう。つい2日前に、伊豆諸島の鳥島から帰ってきたばかりなのです。私は、八丈島の人たちといっしょに鳥島に行き、世界的に希少な海鳥・アホウドリの繁殖地を保全する工事を行なってきました。スコップで土を掘って投げ、排水路を整備し、土嚢を積んで、営巣地に水が流れ込まないようにしました。また、蛇籠(じゃかご)を設置して、土砂の流れを止めました。さらに、営巣地にシバを移植して、アホウドリの繁殖に適した環境を造りあげました。

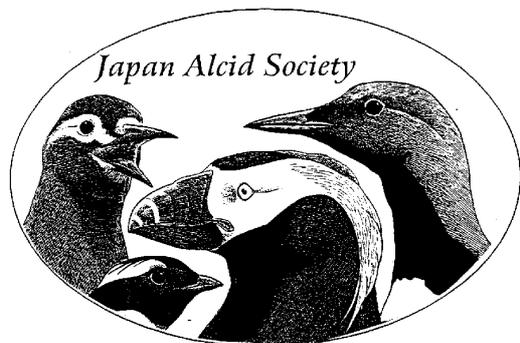
昨シーズン、鳥島では、176組のつがい90羽のひなを育てました。成鳥の観察数は349羽でした。これら3つとも、アホウドリの再発見以来、最高の数です。現在、鳥島集団の総数は推定で800羽から850羽です。

今回の繁殖地保全工事がよい結果をもたらせば、これから2、3年で毎年100羽以上のひなが巣立つようになり、総数は1000羽をこえるでしょう。うれしいことに、アホウドリは今、確実に再生への道を歩んでいます。

21年前、私がアホウドリの保護研究を始めた時、ひなはわずか15羽で、成鳥の観察数は約70羽でした。それを思うと、現在はまるで夢のようです。ここに至ることができたのは、私だけの力ではありません。アホウドリを絶滅の危機から救おうと、たくさんの方がたからのさまざまな方法での協力や支援があったからです。もちろん、生きのびるためにいちばん頑張ったのはアホウドリたち自身ですが。

ですから、私は、アホウドリたちやその保護にかかわったすべての方を代表して、第18回田村賞を受賞したいと思います。そして、私は覚悟を決めています。アホウドリの復活まで、これからも努力をおしまないと。

どうもありがとうございました。



日本ウミスズメ類研究会

事務局 〒078-41
北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目
北海道海鳥センター
ph: 01646-9-2080 fax: 9-2090
E-Mail: kojiono@gol.com
URL <http://www2.gol.com/users/kojiono/>
郵便振替 00170-1-580492 (口座名 日本ウミスズメ類研究会)
02720-9-12926 (口座名 海鳥研究・保護基金)